

つまり主因は常陸川における延長と見てよく、もし大乗の見地から、魚を網より開放していたら、これは湖の資源として残り、魚の習性から見て、開放魚はある程度は回収することも出来たと思いが、殺してしまったのは何の役にもたない。

これは、今日まで奨励指導してきた側にも責任がないとも言えないし、大きく言えば、ずさんな利水事業のしわ寄せであるから、県は充分に漁業者に補償して、来年もこの愚を繰り返さないように改善すべきである。

「桜川一前号第五号五三頁誤字訂正

減水率「九八六ミリ」は「三五ミリ」

工水「八〇万トン」は「九〇万トン」

減水率一日「三八二五ミリ」は「三八二五ミリ」

環境庁では、渡り鳥条約の資料とするため、例年のように野鳥の全国一斉調査を行なったが、本県では霞ヶ浦の渡り鳥が昨年に比べ、地区によっては約半分に激減したことが報告された。

編集後記

奥井登美子

今回、佐賀純一氏に代って、この雑誌の編集を受け持つてみました。

こゝ、三、四か月の間に、日本の歴史は大きく変わってしまいました。

物価高、石油危機、食糧危機、その他いろいろな危機的条件が出つくした今となって、われわれが自分達の生活を守るうえに一番必要なことは、日常生活に立脚した地についた「住民の良識」以外にはないのではないかと思われます。そういう意味で、自然を守る会に入会の方々及びそういう運動に関心をお持ちの方は、むしろ、資源のない日本という国での乱開発に対して批判的であったはずであったし、今日ある石油危機、食糧危機など危機的様相もある程度予測もし、覚悟をきめて行動してきた人たちではないかと思えます。

「日本沈没」や人類の滅亡を予言した「大予言」が、ベストセラーになるなど、今、人々は不安の中で右往左往し、どうしてよいかわからず迷っている状態ではないかと思われます。こういう時こそ、われわれ自然保護任